１　研究主題

主体的に学び、考える力を身に付けた子供の育成

～自分の考えをもたせ、思考を広げ深める指導の工夫を通して～

２　主題設定の理由

平成２９年３月告示の学習指導要領において、教育課程の実施と学習評価について「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が明記された。総則の第３節では、「児童生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。」と示している。加えて、「第１の３の（１）から（３）までに示すこと（（１）知識及び技能が習得されるようにすること、（２）思考力、判断力、表現力等を育成すること、（３）学びに向かう力、人間性等を涵養すること）が偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの授業改善を行うこと」と示している。単元や題材を通して学びのつながりを意識しながら授業改善を行い、児童生徒の主体的に学ぶ力や考える力を育成していくことは、今まさに取り組むべき重要な課題である。

藤岡市は、地域とともにある学校としてコミュニティ・スクールを基盤に、学びの連続性と生徒指導の継続を柱とする小中一貫教育を充実させることにより、子供の学力向上を目指している。この方針を受け、北中学校、藤岡第二小学校、神流小学校の３校は、北連携型小中一貫校としてのカリキュラムを編成し、授業改善に取り組んでいる。

「藤岡市小中一貫教育学習指導系統表」（平成３０年３月）は、９年間の学びのつながりを踏まえ、既習事項を基にした学習の深化・発展・強化・高度化を図るために作成された。市内各校では、これを活用して、「これまでに」児童生徒がどのような学びをしてきたのか（学びの履歴）、「このあとは」どのような学びをするのか（学びのつながり）を明らかにすることで９年間を見通した一貫性のある「ここでは」の指導ができるよう、単元の位置づけを明確にして授業を行うことを目指している。系統表に示されている内容を踏まえて授業改善を行うことは、学習指導要領に示す資質・能力を育成することと同義であると考える。

授業改善を行うにあたっては、以下の２点が重要であると考える。

①既習事項の活用を意識させながら考えさせ、各学習過程の思考につながりをもたせること。

②学習を見通したり、学びを確かめたりすることで、学びに向かう意欲を高めること。

①については、教師が児童生徒に既習事項の活用を意識させる課題設定を行ったり、自力解決、学び合う学習活動等を設定したりすること（学びのつながりを踏まえた「つなぎ教材」の活用）、②については、児童生徒に学習の見通しをもたせることや何をどのように学んだかを振り返らせたり、学びをどのように生かしたいかを自覚させたりすること（単元構想の工夫）で、学習への達成感を味わわせ児童生徒に自信をもたせることができると考える。

本校区では、一昨年度から、北連携型小中一貫校として西部教育事務所より「新学習指導要領の実施に向けた実践研究」の指定（２年間）を受け、授業改善に向けて研究を推進してきた。

一昨年度の実践研究では、「つなぎ教材」の活用と単元構想の工夫を中心に、授業改善に取り組んできた。研究を進める中で、本校区の児童生徒は既習事項と学習内容を関連付け、目的意識をもって学習課題の解決に臨むことができるようになってきた。一方で、自ら考えたり、学び合いにより考えを広げ深めたりするような能動的な学習ができている児童生徒は少なかった。また、授業スタンダードに基づく授業を展開することにより、「自己決定」→「学び合い」という学び方が児童生徒に定着し、学び合いの中での言語活動が活発化してきた。しかし、他者の発言と自分の考えを比較し発言をつなぎながら、自分の考えを広げたり深めたりすることに課題が見られた。

昨年度は、一昨年度の実践を踏まえて、学びのつながりを踏まえた単元構想の工夫と「つなぎ教材」

の活用、学びをつなぐ児童生徒の姿を想定し具現化するための指導の継続を中心に授業改善に取り組んできた。研究の中で、教員が単元に関わる学びのつながりを意識し、単元を見通して指導を行うことで、児童生徒自身の学びの履歴に対する意識が高まり、見通しをもって学習に臨む姿が見られるようになってきた。また、ネームプレート等を活用したことで児童生徒の自己有用感を高めたり、児童生徒同士の意見をつなぎながら考えを深めたりすることができてきたが、そこから考えを再構築させることに課題が残った。

そこで、本年度は、これまでの実践内容のさらなる推進を図るとともに、授業スタンダードを踏まえた上で問題解決の中心場面での主体的な学びを促す手立てをより精選し､対話的な学びを機能させ、児童生徒の発言をつなぐ工夫、学び合いで触れた考えを再度自分の考えと照らし学びを広げ深める工夫等を講じて、個々の思考を深化させる過程の充実を図りたいと考える。

以上のことから、副主題を「自分の考えをもたせ、思考を広げ深める指導の工夫を通して」と設定し、研究に取り組むこととした。

そして、本研究を通して、学びの連続性を意識し､「主体的・対話的で深い学び」の視点に立って授業改善を推進することが、北連携型小中一貫校が目指す「主体的に学び、考える力を身に付けた子供の育成」につながると考える。

３　研究のねらい

藤岡市小中一貫教育の考えに基づく単元構想及び授業実践を通して「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行い、学習意欲の高まりや学びのつながりを自覚しながら学習に取り組む児童生徒を育成する指導方法の在り方について検討を重ね、主題に迫る。

４　研究の見通し

（１）本研究における『主体的に学んでいる子供』とは

学ぶことに興味や関心をもち、自分で課題を見付け、見通しをもって課題解決に粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげようとしている子供

（２）本研究における『考える力を身に付けた子供』とは

授業場面において、課題解決に向けて自分の考えをもち、その考えを伝え合い学び合うことを通して広げ深めた自分の考えを、さらに表現できる子供

５　研究の内容

（１）学びの連続性を意識した指導方法の具体化

①学びのつながりを踏まえた単元構想の工夫

学習過程を踏まえた単元構想の工夫においては、本市の小中一貫教育で推進されている学びのつながりを踏まえた教科の系統表を活用していく。系統表を活用することで、指導している単元の基盤となる既習内容を確認し、次の指導への見通しをもつことができる。見通しをもった学習を展開し、主体的に課題を解決させたり次への学習の意欲をもたせたりすることで、児童生徒に学習の達成感を味わわせるとともに、学習内容の再確認や学習方法の定着を図ることにつなげたい。また、各学年の年間指導計画や各教科の重点・系統表を新学習指導要領で示された各教科の見方・考え方や教科横断的な視点で見直すことにより（カリキュラム・マネジメント)、これまで以上に児童生徒の興味関心を引き出し、学びのつながりを手がかりとして児童生徒の学びを広げ深めていきたい。

②学びのつながりを踏まえた「つなぎ教材」の活用

藤岡市では、学力向上に向けた授業改善の方策として小中一貫教育を推進し、授業において「これまで」「ここでは」「このあとは」といった学びの連続性を意識した授業づくりを行っている。具体的には、「これまで」どのような学習をしてきたのかという学びの履歴と、「このあとは」どのような学びをするのかという学びのつながりを明らかにすることで、９年間を見通した一貫性のある「ここでは」の指導（深い学びの実現）ができるように、単元の位置づけを明確にした指導を実践している。その際、児童生徒の思考を促す大きな役割を果たしているのが「つなぎ教材」である。「つなぎ教材」は、今までも授業の導入場面で多く使われ、児童生徒が興味関心をもって学習に向かう一助になってきた。本研究では、特に学習の中心となる課題解決の場面（追究する課程）での「つなぎ教材」の活用に重点を置き、児童生徒が思考する根拠とさせる。「つなぎ教材」を効果的に示して自力解決を支援することで、児童生徒の学習に対する自信をもたせるとともに、学ぶ意欲の向上を図りたい。

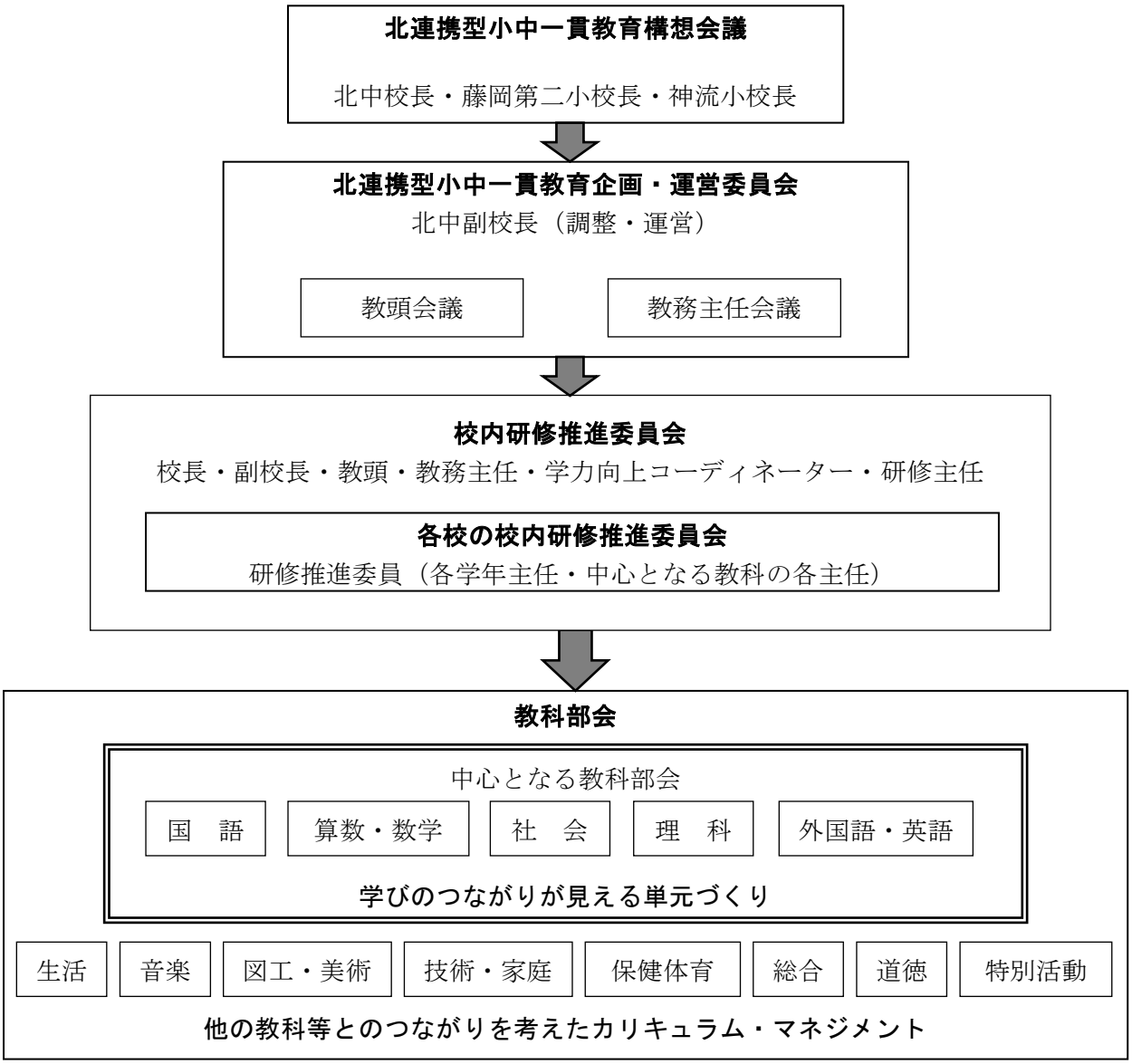
③授業スタンダードに基づいた１単位授業の充実

先に述べたように、藤岡市では「これまで」「ここでは」「このあとは」を踏まえた授業づくりを推進している。その中で、授業スタンダードに基づき「めあて」と「まとめ」の整合性のとれた授業を実践してきているが、問題解決の中心場面での主体的な学びを促す手立てをより効果的に講じていく。具体的には、問題解決場面で「つなぎ教材」を効果的に提示し、児童生徒の思考を深化させる。その際にはタブレット端末等も有効活用し、一人一人の思考の一助としたり、思考の過程の明確化を図ったりする。また、意見交流や振り返りの場面では、本時の学習を通して「『追加』自分の考えに新たな考えを補充し付け加えることができたか」「『変化』自分の考えが別の考えに変わったか」「『強化』自分の考えの根拠をより明確にすることができたか」という視点を与え、思考の深化を目指すとともに、「このあとは」どのような学びをつなげていくのかを児童生徒自身の中で明確化させていき、学ぶ意欲の向上を図りたい。

（２）学びをつなぐ児童生徒の姿を想定し、具現化するための指導の継続

北連携型小中一貫校では、これまでも児童生徒一人一人のよさを認め、ほめ、伸ばす指導を推進し、授業中においても、生徒指導の３機能「自己決定」「自己存在感」「共感的人間関係」を生かした指導を計画的に行うことで、児童生徒の学習意欲を引き出してきた。本研究でも、自力解決の場面で一人一人に学習課題についての自分の意見や考えをもたせ（自己決定）、学び合いの場面で自分の立場や考えを全体の中で明らかにして他者の意見や考えと比較しながら自分の考えを広めたり深めたりする（自己存在感・共感的人間関係）ことをより意識し、児童生徒の学習の意欲を高めるとともに、自らの学びを深めさせる。その際、ネームプレートやワークシート等を効果的に活用し自分の意見や考えを表出させる手立てや、対話的な学びを展開させる学び合いや協働的な学習を機能させながら児童生徒の発言をつなぐ手立てを工夫して、一人一人の表現力を高め、児童生徒の学び合う学習の質をさらに向上させることにつなげたい。

６　研究の組織



※研修組織について

ⅰ）校内研修推進委員会……北連携型小中一貫校としての研修について協議し、各校の研修の方向性を揃え、３校の研修を円滑に推進する。

ⅱ）各校の校内研修推進委員会…北連携型小中一貫校としての研修について校内で共通理解を図り、研修を推進する。

ⅲ）教科部会……国語、算数・数学、社会、理科、外国語・英語の各教科部会を中心に、すべての教員で単元（題材）構想づくりから研修していく。単元構想の検討、各校の計画訪問の指導案に対する助言、研究授業についての指導案検討、先行授業、模擬授業、授業検討会などで授業づくりから参加し、一つの授業を小中の教員でつくっていくことにより、研修の充実を目指す。